

勿凝学問 260

フリードマン的批判とは？

制度への理解に自信のない者とエセ研究者がよく使うお手軽な手段

2009年10月31日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

昨日、月末の金曜日は、ゼミが終わった後には月末飲み。学生と一緒につるの屋で飲んでいると8時になったから、おばちゃんにテレビをつけてもらった。みんなで、細野真宏さんが出演する、「[太田総理](#)」(日テレ)をみて遊ぶ。今日のテーマは、「民主党の年金制度は不安なのでやめて、新たな年金制度をつくります」。

ビールや焼酎を飲みながら、ワイのワイのとテレビをながめ、細野さんが切れ味鋭いことを言ったら、学生たちは拍手喝采の大騒ぎ！

そうしているうちにテレビは終盤を迎え、細野さんの説明により、勤の良い太田総理は今の年金が破綻していないことを納得する。そして、次のようなやりとりがあった。

太田総理 今の年金だったら安心だけど、民主党案だったら破綻するって言われている訳ですよ。それはなんか反論はないですか。(＞ 民主党議員の人たち)

民主党議員 渡辺周(総務副大臣) いや、これはもう、あのお、まあ、細野さんは、福田政権の時から始まったですねえ、まあ与党、当時の側にいますからね。そう言わざるを得ないですけど。

細野君 いえいえ、そういうことはぜんぜんないですよ。あの会議っていうのは、第3者として選ばれたので、僕はまったく政府とは関係ないですよ。

民主党議員 田村謙治(内閣府政務官) 結局、社会保障国民会議以外の人には誰も気付かなかつたと。他の人はみんな、いまの年金制度はもたないと、まさに専門家をはじめみなさんいっている訳ですよ。その国民会議だけが大丈夫と言われて、それで信じられないですよ。

僕は、近くにいた学生に、「典型的なフリードマン的批判だな」と言うと、学生たちは頷く。

フリードマン的批判って？

昨日の講義の中で、次のような話をする。

今週の『週刊東洋経済』の中で面白いのは、87頁のコラム「年金勘違いの元祖はフリードマン」。

フリードマンの『資本主義と自由』は、僕が読めば頭が痛くなるというかヘドが出るような内容だけど、ああいう内容の本が、一斉を風靡していた時代があったわけだ。『資本主義と自由』の中に社会保障について論じている箇所があるけど、その内容がひどい。このコラムにも書いてあるように、

文章の端々からは、賦課方式と積立方式との違い、賦課方式から積立方式へ移行した際の二重の負担、民間年金で逆選択問題といった、現在では当たり前前の基本的事項すら認識していなかったことをうかがわせる。

要するに、フリードマンは、制度を知らないままに、主にイデオロギーというか好き嫌いの感情論を展開しているだけなんだけど、そういう論の展開の仕方は決まっっていて、コラムにも書いてあるように、

それはひとえに官不信という思想性の問題である。同書では「専門家の先生方や政府の管理が当たり前の環境で仕事をしていて政府事業の拡大に抵抗がない」「年金業務があまりに専門的で、運営も専門家にほぼ一任されているため、政府がきちんと監督するのはまずもって不可能。かくて社会保障制度に取り込まれる人びとは増える一方」などの記述が目立つ。

というように、制度本体の評価、政策評価とは関係のない批判をひたすら展開する。『週刊東洋経済』では、この文章に続けて、

興味深いのは現在の日本の論者の多くもフリードマンとまったく同じ物言いをしていることだ。曰く「厚生労働省や政府の審議会委員を務める年金の専門家は国民をだまして」「基礎年金の税方式化に反対する人は、社会保険制度を守りたい厚労省に雇われた御用学者」等々。ケインズと並ぶ20世紀最高の経済学者と称されるフリードマンは、日本の経済学者にとってもアイドル的存在。それゆえ根拠のない議論をしても、「あのフリードマンも言っていたから許される」といった空気が学者の間にあるのではないか。フリードマンの亡霊が日本の議論の質を落としている。

制度や政策効果を正しく理解できていない人は、窮すれば窮するほど、フリードマンのように、制度本体の評価、政策評価とは関係のない批判を展開することになる。まあ、フリードマン的批判というのは、俗に言えばみのもんたチックな論法で

しかなく、論者が言っていることはみのもんだ氏とあまり変わらない、ただのレ
ッテル貼りなんだけどね。

研究者というのは、あくまでも政策の在り方が人びとに与える影響の是非で制度
を評価するしか許されていないわけだ。誰が作ったとか誰が運営しているなどは
抜きにして、制度を是々非々で評価できるようでなくては研究者とは言えないんだ
よ。世の中困ったことに、性格の悪い奴らが利己的に行動した結果、しばしば国民
の厚生を高める政策が展開されていたりもするわけで、行動主体の善悪で政策効果
を評価することはできないんだよね。スミスが『国富論』で説いたことは、要する
にそういうこと。そういう意味では、こうしたフリードマン的批判が癖になっている
人というのは、はじめっから研究者ではないと言えるんだけど、学生である君た
ちは、将来研究者にならないとしても、フリードマン的批判しかできない品のない
人間にならないように気をつけな。

ということで、『週刊東洋経済』「年金激震」の〈誰が何を間違えたのか?〉にならって…

7 フリードマン的批判		
主張している主な人	総務副大臣	渡辺周民主党議員
	内閣府政務官	田村謙治民主党議員
ここがポイント！	制度への理解に自信のない者と エセ研究者がよく使うお手軽な手段	

まあ、エセ研究者を列挙しておくことは控えておくよ。だって、彼らが書いた本や新聞
への過去のコメントをみれば、すぐに分かることだからね (笑)。とにかく、言論界からフ
リードマン的批判を締め出さないことには、言論界の質は高くないんだけど、予測と
いう意味で言えば、それは無理なことだろヨ。なにせ、大衆にウケるんだ、これがっ、と
ともに、こういうフリードマン的批判しか理解できない人たちのことを、一般に大衆と呼
んだりもするんだけどな (笑)。

最後に——番組の中で、「ミスター年金のえなりかずき！」と呼ばれるシーンがあった。
ミスター年金がえなりかずき氏だったら、僕も異論はない。彼は、民主党の年金公約が眉
唾ものであることをかなり分かっていたからねえ。。。ミスター年金のえなり君と太田総理
に、『週刊東洋経済』の「年金激震」を送ったらどうだい。彼らは、立場が知的誠実さを拒
ませていたあの時の民主党の議員とは違って、聞く耳をもつところまで来ていた。年金や
財政の問題は、聞く耳をもってもらってところまで話をもっていくのが大変なんだよね。こ
れは細野さんの論理の正しさの成果だと思う。そして東洋経済は、ついでに「税金超入門」
も送ったらどうかな。